

で構成しています。藤生地区には鉢山という、藩政時代から萱刈場・家畜の飼料用の草刈場などとして利用されてきた共有地があります。近年、旧態の利用が衰退するとともに他地域からの無断侵入者やゴミの不法投棄が見られ、問題になっていました。また、自然食品ブームのなかで、山菜を求め関東方面からの観光客も増加していました。そこで、放置されてきた共有地の積極的活用と地域の活性化を図ることを目的に、平成7年に藤生わらび生産組合を結成し、同時に鉢山を林業構造改善事業を導入して整備し、観光わらび山として一般に開放してきました。鉢山の中腹には管理棟を置き、近くには案内板を設置、林道に沿って駐車スペースを設けたり、そのほかトイレやテントの休憩所も設けました。また、管理棟前には、一年を通じて水が枯れることがないわき水「岳清水」があり、昨年は水飲み場の整備も行いました。こうして、訪れた人が快適にワラビ採りを楽しんでもらえるように、毎年各種改善を重ねてきました。

わらび山の1年は山焼きから始まります。5月上旬、雪が溶けると、地面に残っている枯れ草を焼き払います。これは藩政時代から続いている地区の伝統行事です。山焼きをする目的は害虫駆除のほか、ワラビ採りの人が足を滑らせないようにするためでもあります。山焼きを始めるときは、まず他の地区が所有する山林に火が燃え移らないように境界沿いの枯れ草等を刈払いながら尾根付近から焼き始めます。次に斜面を少しずつ下に向かいながら山全体約85haを焼いていきます。山焼きが終わると山一面が真っ黒になりますが、この数週間後にはワラビや各種山菜が山一面を覆い真っ青になり、わらび山開園となります。山焼きは、ほぼ全組合員世帯が参加して行われます。平成16年には境界に沿って防火線を造成し、より安全な山焼きが実施できるようになりました。

その年の天候にもよりますが、観光わらび山は5月下旬に開園します。ワラビの生育も考え、水・土・日曜日の週3日間だけ開園しています。朝8時から12時まで山菜採り放題、「ここは広いから探せば必ずワラビが見つかる」と評判で毎年何回も遠くから訪れる常連の方がいるほどで

す。組合員は交替でお客への応対及び山の巡回を実施し、円滑な運営を心がけています。また、ただ来場者を待つというだけではなく、前年に来られた方に対しては開園のお知らせのチラシを送るといった集客の努力も欠かしません。おかげで毎年約1カ月半の開園期間に延べ1,800人前後の方々にご利用いただいております。

3. 新たな取り組み

続きまして、最近の活動から観光わらび山の運営とは別に取り組んでいるアクの弱いワラビの栽培について紹介します。全国的な問題ではありますが、藤生地区でも高齢化・農業後継者不足等の理由から遊休農地が増加しています。また、サルやクマといった野生動物による農作物等への被害が拡大していて深刻な問題となっています。そこで、これらの問題解決の一手段となるのではないかと、平成15年から福島県林業研究センターで選抜されたアクの弱いワラビの栽培に取り組み始めました。研究センターから約500株の根株の提供を受け、集落内の遊休農地2aに植栽、養成畑を造成し、除草や施肥などの手入れを行いながら、本格的な栽培に向けて根株の増殖を図っています。平成16年には養成畑で増殖した根株を用い、さらに2.5aの養成畑を造成しました。

また、根株の増殖と並行して、今後のワラビの販売に結びつけていくため、食味試験を平成16、17年の2年間にわたり実施しました。食味試験では、一般家庭で誰にでもできる方法により、アクの抜け方について在来種のワラビと比較し、方法、時間の経過でアクの抜け方がどの程度違うか検討を行いました。組合員、町役場職員、県農林事務所職員が試食会に参加し、アクの抜け方の判定を行った結果、通常ワラビのアク抜きには約一晩かかるのに対して、アクの弱いワラビの場合は重曹に2時間漬ければアクが抜けることが分かり、アクの弱いワラビの優位性が示され、栽培への新たな意欲へと繋がりました。

養成畑で順調に根株の増殖を図ることができたことから、去年は、ワラビ栽培の新たな展開として、これまで共同で増殖を行ってきたワラビ

根株を、栽培を希望する組合員に配布し、栽培面積を拡大することになりました。また、はじめて栽培に取り組む組合員もいるため、根株の掘り取りに際し栽培講習会を併せて開催しました。講習会には11世帯から15名が参加し、養成畑2m×20mの区画2カ所でワラビの根株を掘り取りました。ワラビの根に付いている芽には2種類あって、芽吹いてワラビになるものと伸びて根になるものがありますが、それらの芽が付いていないと増殖が遅れるため、掘り起こした根株を参加者全員で芽のあるものと無いものに選別を行いました。その結果、芽が付いているものだけで約3,600株を採取でき、講習会後は参加者で根株を分配し、昨秋から今春にかけて各自植栽し、合わせて約30aのワラビ畑を新たに造成しました。アクの弱いワラビの栽培の広がりにより、ワラビを通じて地域の活性化を図ってきた藤生地区における新たな特産品の一つになるのではないかと期待しています。

その他、組合では、観光わらび山の営業が7月上旬に終わると、毎年の恒例行事として研修旅行を実施しています。研修を行うことで自分たちの活動にいかしたり、組合員同士の意見交換が活発になり、わらび山運営の新しい工夫にも繋がっています。

4. 今後の課題

今後の活動に向けての課題ですが、比較的改善されてきているとはいえ、いまだに見受けられるわらび山での山菜採取マナーの悪さへの対応についてです。これは地道な活動にはなりますが、入山者への呼びかけ、山の巡回、開園時間の長さ等について検討を行っていこうと思っています。また、一般組合員にまで広がったアクの弱いワラビの栽培については、栽培の定着化を図るとともに、アクが弱いという特長を生かした販売方法を検討していく必要があると考えています。

5. おわりに

最後に、藤生わらび生産組合では、ワラビを通じて地区住民が一体と

なって様々な活動に取り組んできました。放置しがちだった共有地を観光わらび山として活用することで、ゴミの不法投棄といった問題はほとんどなくなりました。さらに各地から訪れる人との新たな交流も生まれ、地域が活性化しています。わらび山を運営することは様々な苦勞もありますが、地区全体で役割分担しながら取り組むことで、住民一人ひとりの生き甲斐づくりにもつながってきています。今後も地域の財産であるわらび山を活かしながら地域の繋がりを大切に活動を前進させていきます。